

## 佐々木順三

— 信仰に導かれて —

大島宏・寺崎昌男

## 「日本は負ける」

『文藝春秋』一九九七年四月号。「同級生交歓」のグラビア記事には、作曲家の三善晃ら旧制都立高等学校（現・東京都立大学）の卒業生十一名の写真が見開き二頁で大きく掲載されている。下には短い文章。写真の一人、内野滋雄（東京医科大学教授・当時）はこう記している。

「サイパン島が陥ちた日、朝礼で佐々木順三校長は『日本は負けるだろうが、どのような事態となっても学問を忘れてはならない。それが諸君の支えになる』と訓示した。髪を七三分け、ゲートルを付けないリベラリストは後に立教大学の総長となった。当時、この危険な発言が生まれる『自由な気風』が伝統の『真理の探究』とともに我々のバックボーンとなっている。」

敗戦からまだ間もない一九四六（昭和二十一年）六月、この七三分けのリベラリストは立教大学総長に就任した。このとき、敗戦後の立教再建は佐々木順三の手に託されたのであった。

## 旧制高校の教師として

佐々木順三が父・林蔵、母・かく（戸籍名は春）の三男として誕生したのは、一八九〇（明治二十三年）三月のことだった。出身は東洋一の湧水として名高い柿田川近くの静岡県駿東郡清水村（現・清水町）。二人の兄はユーモア作家となる長兄・邦と日本聖公会の主教となる次兄・二郎。順三の誕生から二年後には、後に裁判官となる義朗（一九三二年没）が生まれた。

郷里の静岡のほか東京や大阪で少年時代を過ごした順三少年は、一九〇八（明治四十一年）年に旧制沼津中学校を卒業、第一高等学校に入学する。一九一一（明治四十四）年に東京帝国大学文科大英米文学科に入学。一九一四（大正三）年に首席で卒業し、その後数年間を、沼津中学校時代の恩師である落合寅平が校長を勤めていた福島県立会津中学校の教員として過ごす。

一九一八年（大正七）年、転機が訪れる。二八歳の若さで、英語・英文学に長じていた兄・邦の後任として、岡山の第六高等学校教授の職に就き、旧制高校英語教員としての歩みが始まった。その後、第八高等学校（名古屋）・静岡高等学校に赴任する。一九二五（大正十四）年から二七（昭和二年）にかけて英米仏に留学し、英文学・英語教授法などを研究した。一九三九（昭和十四）

年刊の『教会暦年の研究』（聖公会出版社）は、この留学の成果である。一九三八（昭和十三年）年、母校の第一高等学校に生徒主事兼教授として赴任。その後、安倍能成校長の下で教頭を勤め、一九四三（昭和十八年）年九月、都立高等学校の校長に迎えられた。冒頭の訓辞はその翌年七月のことだった。

英語教師・佐々木順三は、おだやかで控えめな、しかしユーモアのある英国風の紳士として、生徒の記憶に刻まれている。

「英国紳士の代表的な感じのする佐々木先生の口から時折り発せられる辛辣刺すが如き皮肉は怠惰な学生にとつては相当打撃でしたが、先生の軽快な訳読は誠に感嘆の外ありませんでした。」（『八高五十年史』一九五八年、一九〇頁）

「容姿も端正で、英国紳士風の方であった。……私は先生の温厚な人柄に憧れ、自分もそうなりたいたいと思っていた。」（『青春奏つへし』一九八二年、二二二頁）  
もう一つの回想がある。都立高等学校時代の佐々木について記された文章である（『八雲』一三四号、一九八七年）。

「都立と言えば、まず佐々木順三校長、そして佐々木校長と言えば正門主義と真理の探究……佐々木校長はよく『たとえ廻り道でも（正門から入れ）』というこ

とを言われた」

この回想を記した教え子は「正門主義」を「人の上に立つて、人々を指導すべき立場に生きる以上、公明正大に振るまえ、といわれているような気がした」、「コンソソと生きるな。能率ばかりを重んずるな。むしろ過程を重視せよ、と仰言られたかったのかもしれない。或いは本音と建前を使い分けるような生き方をするな、ということだったのかもしれない」と理解している。佐々木は、温容に秘めた潔さを持ち、物事が道理にはずれることを嫌っていた。

### 信仰の人

佐々木順三は信仰の人だった。一九〇三（明治三十一年）、聖ヨハネ教会で洗礼を受けて以来、敬虔な聖公会の信徒だった。

静岡高等学校時代、生徒たちの親睦団体「嶽秀会」が発足するにあたり寄せた言葉は「Peace in earth comes to men of good-will」（『青春奏つへし』一六六頁）。ルカによる福音書の言葉「地には平和、御心にかなう人にある」である。また、令息の研二によれば、都立高等学校の校長の頃、毎週一回の集会では常に聖書の話をしており、それゆえか、特高に監視されることもあったという。

おそらく、このような言動は、佐々木のキリスト教信仰にもとづいていたのであろう。そして、その思想には、

新渡戸稲造と内村鑑三が深い影響を与えているように思われる。

佐々木が第一高等学校に学んでいた一九一〇年頃、一高生や東大生の多くは、右の二人に感化を受けた。佐々木も例外ではなかった。晩年に綴られた『佐々木家の人々』でも二人のことに多くの紙幅が割かれている。

新渡戸も内村もキリスト教徒だった。ほかの一高生がそうであったように、佐々木も新渡戸校長による課外の倫理講話を楽しんだ一人だった。「極めて分かり易い教養ある言葉で、すっかり身につけて居る基督教に基づく世界観人生観を切々と語ってくれるのであった」と綴っている（『佐々木家の人々』六七頁）。また、同じ頃に一高で学んだ矢内原忠雄の文章を引いて、新渡戸の思想の本質をこう記している。

「汝ら互いに相愛せよ」。

内村は、言うまでもなく、無教会主義を掲げたキリスト者だった。「聖書とキリストの贖罪という恩恵による救済の信仰のみを中心とし、他の教会制度・教職制・礼典類は、すべて不可欠なものではない」（『日本キリスト教歴史大事典』）とする立場である。もともと、聖公会の信徒であった佐々木が内村の主宰する集会に出席することはなかった。しかし、内村の著作や論文などを通じて内村の思想に接し、その影響を受けたこ

とは『佐々木家の人々』や『平民の信仰覚書』の端々から伝わってくる。

「キリストが教会に与えた権能は、人類の救いを全うせんがためのもので、この世の事柄についての権能ではない。そうした外的権能は、信仰の根本的基礎とはなり得ない。イエス・キリストの権能は、教養ある信者には、外面的のものでなく、我々に語りかけ、又、我々の心の中で語る声である。人間の霊の完全な自律（自由）は、キリストへの完全な服従である。」（『平民の信仰覚書』三九頁）

後年、立教大学チャプレンだった竹田鐵三は「先生はよくお祈りされる人であった。それと同時に神のみ言葉なる聖書をよく読まれた人であった。したがって稀に見る聖書通、聖書講義の達人。それもソノ筈、毎日読む聖書が何冊もスリ切れたという」（『されど主よ』一九九七年、一七七〜一七八頁）と回想している。

祈り、聖書を読み、神の言葉を自らの中に聞くこと。そして、隣人を愛すること。氏のクリスチャニティーの神髄は、まさにここにあり、常にこれを実践しようとしていたとみられるのである。

樹静かならんと欲すれども風やます

聖公会の熱心な信徒だったが、立教の卒業生ではな

かった佐々木順三。その佐々木が立教大学の総長へ就任するのは、敗戦から一年もたたない一九四六年六月のことだった。

敗戦直後の立教は、戦時中の「信教の自由の侵害」に対して占領軍当局から厳しい指弾を受け、当時の首脳陣の多くが退職したのち、キリスト教主義による再建に迫られていた。一九四五（昭和二十）年十月、暫定的に須藤吉之祐教授が大学総長、中学校長、工業理科専門学校長の事務取扱として就任していたが、本格的な再建は正式な総長の就任を待たなければならぬ状況にあった。

このような状況のなか、当時学院の理事長であった松崎半三郎は東京帝大総長・南原繁に人選を相談する。クリスチャンであった南原が推薦した人物、それが都立高等学校校長・佐々木順三だった。佐々木にとって南原は、一高時代にキリスト教の関係で親交を深めた人物でもあった。

「自信が持てない」という理由で南原の推薦を断った佐々木を数日後に訪ねてきたのは、日本聖公会の南東京教区の主教であり立教学院の理事でもあった須貝止である。須貝は、日本聖公会京都教区の主教だった兄・二郎の親友で、順三にとっても兄のような存在であった。佐々木の著『教会暦年の研究』の刊行も、

須貝の支えによるものであった。その須貝による強力な要請、そして邦・二郎という二人の兄の熱心な勧めによって、佐々木は総長への就任を決心する。信仰のつながりが総長就任を生んだのだ。

佐々木は就任の挨拶で「立教大学の新総長たる可く交渉を受け一応お断りしたが諸般の事情は木静かならんと欲すれども風止まず、遂にお引き受けしました」（『立教大学新聞』一九四六年七月二四日）と述べた。「樹静かならんと……」は、人生は思い通りにはゆかないことのとえだが、もともとは親の生きている間に孝行せよという戒めの意味でもある。佐々木にとって、総長就任は自らの意思とは異なるものだったかもしれないが、学生時代に通った神田諸聖徒教会の主牧者タッカーをはじめ、帆足秀三郎や高松孝治ら、当時世話になった立教関係者に対する恩返しであったのかもしれない。

総長就任後の佐々木は、学院・大学の再建に力を尽くした。新学制への移行にあたっては、立教小学校を新設し、旧制立教中学校を新製の中学校と高校に分離独立させるなど一貫教育の組織を整備するとともに、各校の校長を兼任した。さらに、一九五一（昭和二十六年）年には財団法人から学校法人へと移行した立教学院の初代院長にも就任した。この間、一九四九（昭和

二十四）年には祈祷書の研究により、米国のケニオン大学から神学博士の学位を授与されている。

### 建学の精神の回復

立教を再建すること。それは、キリスト教の信仰にもとづく教育を行い、立教建学の精神を回復することであった。

佐々木は言う。

「立教大学建学の精神は、その当初より終始一貫して万物の創造主たる神を畏れ、その子キリストの聖言に聞くことをもつて『知識の本』となす基督教の根本的信仰に基づくもので、あらゆる学問の研究は、自然と歴史の中に啓示された神の知恵を謙遜なる心をつつて探求し、全ての心理と善の源を神の中に見出すと共に、神の限りなき智慧によって、人間の裏に備えられた永遠の道を会得して、人類の平和と福祉に貢献することである。」（「立教大学 建学の精神」）

建学の精神の回復と維持にあたっては、時に困難に直面することもあったに違いない。小川徳治によれば、総長という仕事柄、「時には策士に利用されたこともあり、先生ご自身が非常に意外だと落胆された」こともあったようである（「佐々木順三先生を想う」『立教』一九七六年七月号）。つらい体験であったと思われるが、

どんなときでも、怒ったり、他人の悪口を言ったりすることはなかったという。常に佐々木を支えたのは、信仰とそれにもとづくキリスト教の世界観であった。

一九五五（昭和三十）年、約十年間の総長職を辞した氏は、文学部の兼任講師としてキリスト教文学を教えていたが、一九六六（昭和四十一）年には病氣療養のためにその職も辞すこととなった。その後は自らの信仰を綴り、孫の成長に目を細める日々を送った。一九七六（昭和五十一）年五月、肺炎のため逝去。享年八六歳であった。

「付記」文中すべて敬称を略した。本稿を草するにあたり、佐々木研二氏には大変お世話になった。記して感謝する次第である。



佐々木順三氏